

の教授は松本信一（一八八四～一九八四）であったが、彼は  
大正七（一九一八）年より昭和十九（一九四四）年までの二  
十六年間にここで過した。教授になるには自分の意志もさ  
ることながら、周囲のいろいろな条件が加わってくる。太  
田の場合は来簡が保管されていたことに加え、日記も残っ  
ており（ただし教授就任のいきさつなどについては多くを語っ  
ていない）その経緯のよく判る稀有な例であると思う。『知友  
書簡集』公刊の意義は大きい。

（大阪府豊中市 皮膚科開業）

## 芳名録（金沢医学専門学校） について

寺 畑 喜 朔

資料検索中、金沢医学専門学校時代の来訪者の芳名録が  
発見された。記名は明治四十一年から大正十一年までで、  
主な医学関係者を摘録するおとぎのとおりである。

内田守一（明41・10・13）池原康造（明42・1・27）三宅秀  
（明42・6・7）志賀潔（明42・7・8）芳賀栄次郎（明43・  
3・30）鈴木寛之助（明43・7・16）三輪徳寛（明43・8・9）  
長井長義（明43・12・6）平山増之助（明43・10・6）佐藤三  
吉（大2・8・19）蔡文森（大2・10・30）久保猪之吉（大  
5・8・12）荒木寅三郎（大5・9・6）青山胤通（大5・  
10・17）藤浪剛一（大6・6・22）北里柴三郎（大7・10・  
13）スロイス（大9・5・20）国友鼎（大9・6・14）沢田敬  
義（大10・7・8）尼子四郎（大11・3・24）

以上の来訪者のうち、来訪の目的と内容の判明した事例

について記載する。

(一)大正七年十月十三日、恩賜財団済生会会長徳川家達が北里医務主事、大谷理事長らを伴って北陸地区の済生会事業の実状調査に来沢した。同日午後より石川県金沢病院をつぎのように巡視した。「金沢病院の済生会委託患者の状況視察の為同院に赴きたるが玄関前には磯野管理部長、西田副長等の出迎を受けて公爵は階上応接室にて高安校長に面接して委託患者十七名に対し状況の一斑を聞かれたる後院長の案内により先づ眼科病室に於ける患者山口喜代、荻田フテ、清水千代の三名を見舞た北里博士より会長巡視の趣旨を伝え更に内科病室の中西吉太郎、川上順次郎の病状を視て同院を辞し……」(北陸毎日新聞第六七一七号より)

(注)北里は記録によれば、明治四十年七月二十八日、大日本私立衛生会石川支部総会において演説のため、山根代議士、田代医科大学教授と同伴して来沢した。また、大正四年七月二十三日、金沢市医師会結核予防会で講演「日本に於ける結核病蔓延予防に就て」のため来沢した。

(二)大正九年五月二十日、ベイ・ア・スロイスの子息金沢に来る。「予ねて横浜に碇泊中の南米印度艦隊司令官スロ

イス提督は嚴父スロイスが明治初年我国に渡来し今の金沢医学専門学校の前身たる金沢医学館に雇聘せられて教養中西町衛戍監獄附近に於て誕生せる關係より今回の来朝を機とし同艦が神戸回航後本日金沢に來り、亡父の經營した学校の遺跡を訪ねるそうであるが其当時親しくスロイスから教授を受けた味噌蔵町の不破鎖吉、藤本純吉、庄田喜太郎の諸氏及び高岡町山本貞二郎、大聖寺稻坂謙吉諸氏はスロイス提督を迎えて懐旧談をする」と云ふ、「来沢当時は大平町寺西邸跡今の横山鋳業部の地に邸宅を構へて居たが後衛戍監獄附近に移り更に転じて物産陳列館附近に家を移したと云ふ、本日来沢のスロイス提督は即ち衛戍監獄附近の邸宅で生れたもので明治五年に生れたものらしい」(北国新聞第九七六号より)

来沢したスロイス子息を案内したのは、高安右人(校長)、金子治郎、松原三郎の三教授で古い絵図面を示して、生誕地、医学館跡などを訪ねた。ついで、金沢医学専門学校では「医学校にはスロイス提督の両親が親しくペンを執って一々ラテン語で説明を加へた古い植物の図譜が残つて居る、夫れを提督に示すと確かに父母の手に成つたものに

相違ないと幾度もく手に取上げて懐かしそうに打眺め自からもペンを執って之に署名した。最後に金沢病院に至りスロイスが教鞭を執って居た頃使って居たと云ふ一個のインキ壺が遺つて居るのを見て懐旧の情甚だ切なるものがあるが如くインキの汚点一つにも千万無量の想出を注いで居たのは然もこそと思はれた」(北国新聞第九七六七号)

「古い植物の図譜」は金沢大学医学図書館に「オーデマン植物図譜」(九一表、四六四図)として保存されている(同様のもの二冊あり、その一部に書き込みがある)。

スロイス子息の署名文は「おのじとくへである

Het was mij een groote Vreugde in de bijchriften  
de handschriften te herkennen van mijn Vader &  
mijn Moeder

20 Mei 1920 K. F. Sluys

この図譜の原本は

Oudemans, C. A. J. A. Aanteekeningen op het systematischen pharmacognostischbotanische gedeelte der Pharmacopoes Neerlandica. Text, und Atlas.  
1854-56.

(三)大正二年八月十九日、金沢市医師会医政史(昭十八)によれば、庶務事項のこの当日について、つぎの記述がある。

「伝染病研究所技師志賀潔氏来沢。「結核治療法評論」に就き本会員に講話す。終了後金谷館にて晩餐会を開き懇談。佐藤三吉・木村孝蔵両博士も出席す」

今回の来訪者芳名録とその内容調査により、芳名録のものつ史実としての価値が更めて評価された。

(金沢医科大学)